



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

モンテーニュ★

エッセー I

河野與一校閲 原 二郎訳

世界文學大系

筑摩書房版

世界文学大系 9A

モンテールニユ

昭和37年1月30日発行

定価 500 円



訳 者 原 二 郎

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話 (291)局 7651

目次

エ
セ
ー

原
二
郎
訳

第一卷（第一章—第五十七章）

5

第二卷（第一章—第十二章）

237

モンテーニュについて

渡
安
辺
ド
レ
ー
ジ
ー
ド
夫
訳

450

裝
幀
庫
田
發

モンテ・ニユ ★

読者に

読者よ、これは本当のことを書いた書物である。はじめからことわっておくが、これを書いた私の目的はわが家だけの、私的なものでしかない。あなたの役に立つことも、私の榮譽のためということも何一つ考えなかった。そういう試みは私の力に余ることだ。私はこれを、身内や友人たちだけの便宜のために書いたのだ。つまり彼らが私と死別した後に（それはすぐにも彼らに起こることだ）、この書物の中に私の性格や気質の特徴を幾らかでも見いだせるように、また、そうやって、彼らが私についてもついていた知識をより完全に、より生き生きと育ててくれるようにと思つて書いたのだ。もしも世間の好評を求めるためだったら、私はもっと装いをこらし、慎重な歩き方で姿を現わしたことであろう。私は単純な、自然の、平常の、気取りや技巧のない自分を見てもらいたい。というのは、私が描く対象は私自身なのだから。ここには世間に対する尊敬にさしさわりがない限り、私の欠点や、生れながらの姿があらのままに書いてあるはずだ。もしも私が、いまなお原始の掟を守りながら快適な自由を楽しんでいるといわれるあの民族の中に暮らしているのだったら、私はきつと、進んで、自分を残る限な

く、赤裸々に描いたのであろう。読者よ、このように私自身が私の書物の題材なのだ。あなたが、こんなにつまらぬ、むなししい主題のためにあなたの時間を費やすのは道理に合わぬことだ。ではご機嫌よう。モンターニユにて。千五百八十年三月一日。

第一巻

第一章 人はいろいろな方法によって同じ結果に到達する

④われわれに対して怒った人たちが復讐^{そくしゅう}を手にしてわれわれを自由自在にできるとき、彼らの心をやわらげるとも普通の方法は、降伏して、彼らの同情と憐憫^{れんきん}の情を動かすことである。しかし、この方法とまったく反対の勇敢と不屈がしばしば同じ結果を生んだこともある。長い間、わがギユイエンヌ州を統治したウエールズ公エドワードは天性多くのすぐれて高邁な素質に恵まれたお方であるが、リモージュの人々にひどく立腹し、その町を武力で攻め取ったときに、殺戮^{ころころ}されようとする庶民や女子供が慈悲を乞うて叫び、足下に身を投げ出して泣きわめいても一向に足を止めず、さらに町の中に押し進んだところ、そこにたった三人のフランス人が信じられないほどの果敢さで、勝ち誇る彼の軍勢を食い止めているのを認めた。そこでそれほどの目覚ましい勇氣に對す

凡例

本書に使用したテキストは Pierre Villey : Les Essais de Michel de Montaigne, 3 vol., 1922 (Félix Alcan) による。

モンターニユの「エセー」は、一五八〇年に、九十四篇が二巻に分けて刊行された。それから八年を経て、一五八八年に、さらに十三篇が第三巻として刊行された。それと同時に、第一巻と第二巻にほとんど改作に近い大増訂がほどこされた。これが一五八八年版である。その後、モンターニユは、一五八八年版の一本を常に座右に置き、その余白に自筆で丹念な細字で次々と書き加えをして、死ぬ間際までその仕事をやめなかった。これが今日のポルドー市版という決定版の原本となった。

訳文中、④は一五八〇年版のテキストを、⑤は一五八八年版における増訂の部分で、⑥はその後モンターニユが自筆で加筆した部分を示す。

訳文中、前後に一行を明け、二字下げた箇所はラテン語の韻文の引用である。ラテン語の散文の引用は、行を明けずに、へん印を付した。いずれも、テキストの体裁にならったものである。中に数カ所、ギリシア語、フランス語、イタリヤ語の引用のある場合は、その旨を注でこわした。また引用の出典はテキストにはないが、注において示した。本文の中で、モンターニユが典拠とした著者および著書の箇所をも注においてできる限り示した。

る敬意と尊敬が、はじめて彼の怒りの切先を鈍らせ、彼はこの三人をはじめとして他の市民全部を許した。

エピロス公スカンデルベグは部下のある兵士を殺そうとして追い廻したときに、その兵士は卑屈と懇願の限りをつくして公の怒りを鎮めようと試みたが、万策つき最後に剣をとって決然として立ち向かった。彼のこの決心に主人の激怒はびたりと治まった。主人は彼がかくも気高い決意をしたことを見て許したのである。この実例は公の驚くべき武力と勇敢さを読んだことのない人には別の解釈をされるかも知れない。

皇帝コンラート三世はバウアリア公ゲルフンを攻囲したときに、いかなる屈辱的な降伏の申し出がなされても受けつかなかった。せいぜい寛大な条件として、ただ公と一緒に囲まれている貴婦人たちがその名誉を傷つけられることなく、はだしのまま、身に持てるだけのものを持って城を出ることを許した。すると彼女らは殊勝にも自分らの肩に夫や子供や公自身をも担いで出ようとした。皇帝はその気高い勇気を深く嘉して、嬉し涙を流し、それまで公にいだいていた激しい敵意をやわらげ、その後はすつと、公およびその一族を寛大に扱った。

④これらの方法は二つとも容易に私の心を動かすだろう。というのは、私は憐憫と寛大に対しては驚くほど弱いからだ。もっとも私の考えるところでは、私は尊敬よりも同情のほうにより自然に負けそうだが、だが憐憫はストア派にとつては悪い感情である。彼らは、われわれが悩める者を救うのはいいが、それと一緒に心がついてくじけたり、悲しんだりしてはいけなと言っている。

⑤さて、これらの人たちがこの二つの方法に攻め立てられ、試されると、一方の方法には毅然として堪えなが

ら、他の方法には屈服するところを見ると、これらの実例は私にはいよいよ適切に思われる。あるいは次のように言えるかも知れない。「憐憫に心がくじけるのは情にもろく、お人好しで、柔弱な性格の結果であり、したがって、女とか、子供とか、俗衆とかの比較的弱い性格がおちいりやすいものである。しかし、涙や懇願をさげすんで、ただ勇気の聖なる像に対する尊敬のみに服するのは、強い一徹な魂が男らしい頑固な逞しさを愛慕し尊敬する結果である」と。しかしながら、それはど高潔でない魂の中に驚嘆と感嘆の念が同じ結果を生むことがある。その証拠がテレーバイの市民である。彼らはその將軍たちが規定の期間を越えて職権を継続したかどでこれを死刑にするために裁判にかけた。そのとき、このような非難の重圧に屈して、身を守るために哀訴と嘆願を繰り返すだけであつたペロピダスに対しては、彼らはやつとのことで無罪にすることを納得した。これに反し、エパメイノンダスは堂々と自分の功績を述べ、⑥傲慢⑦不遜な態度で、国民がその恩を忘れていことをなじつたため、彼らは投票用の玉を手にとる元氣さえなくなり、この人物の高邁な勇気を声高に称えて集會を解いた。

⑧老ディオニシオスは多くの時日と困難の後にレギオムの町を攻略し、そこにこの町を頑強に守った偉大な人物である將軍のフィトンを捕え、これを復讐のいたましい見せしめにしようとした。彼はまず、フィトンに向かつて、いかにして前の日に彼の息子と身内の者全部を溺死させたかを話した。それに対してフィトンは「彼らは私より一日だけ幸せだ」と答えただけであつた。次にディオニシオスは彼を裸にし獄卒に命じて縛らせ、これを辱しめながらむごたしく鞭打たせ、口汚い侮辱的

第一章

- (1) エピロスはギリシア西部の地方。今日のアルバニア。
- (2) 一四〇三六七、アルバニアの民族的英雄。
- (3) 一〇九三—一五二、ドイツ王。
- (4) ジャン・ボダン「歴史を容易に理解する方法」序文。
- (5) 前四二〇—三六二、テレーバイの政治家で名將軍、スパルタを破つて、一時テレーバイの覇権を確立した。
- (6) プルタルコス倫理論集「自慢する方法」。
- (7) 前四〇五—三六七年、スュラグサイの僭主。
- (8) シキリアの対岸、イタリアの長靴の先端にある。

な言葉浴びせながら町じゅうを引きずり廻させた。しかし彼は少しも取り乱すことなく、常に変わらぬ勇氣をもちつづけた。そして毅然たる面持で、かえって声を高めて、自分の名譽と光榮ある死の原因が、祖国を暴君の手に渡そうとしなかったことにあることを思い起こさせ、ディオニシオスの上に遠からず天罰がくだるであろうと脅かした。ディオニシオスは、部下の大部分の兵士たちの目に、この敗軍の將が、彼らの大将とその勝利を輕蔑して不遜な言葉を吐いたことを憤慨するところか、まれに見る勇氣にあつてにたれて心がくじけ、叛亂を起こして獄卒の手からフィトンを奪おうとする氣持にさえなかりかけているのを見て、その拷問をやめさせ、彼をひそかに海へやつて溺死させた。

④まことに人間というものは驚くほど空な、變わりやすい、不定な存在である。人間について恒常齊一な判斷を立てることはむずかしい。あのように、ポンペイウスはマメルティヌス人の市民全部に大いに怒っていたのに、一市民ゼノンの罪を一身に引き受け、自分を罰するだけにとどめていただきたいと願ひ出た勇氣と氣概に感じて市民全部を許した。ところがスルラの客人はベルシア市で同じ勇氣を示したのに、自分のためにも他の人たちのためにも何の得るところもなかった。

⑤また、私のはじめの例とまったく反対の例であるが、もっとも豪胆で敗者に対して大いに寛大であつたアレクサンドロス大王が非常な困難の後でガザ市に攻め入ったとき、そこを指揮していたベデイスと出会つた。大王は攻略の間に彼の驚くべき豪勇の証拠の数々を経験していたが、そのときのベデイスはたった一人で部下からはぐれ、武器はちぎれ、満身血だらけ傷だらけになつて四方

から打つてかかるマケドニア兵に囲まれながら戦いつづけていた。大王はほかに数々の損害を受けた上に、すでに自分の体にも二つの生ままししい傷を受けていたのだ、これほどに高くついた勝利にかつとなつて、ベデイスに向かつて、「ベデイスめ、おまえの望み通りには死なせぬぞ。捕虜をいじめるため考え出したあらゆる責め苦を受けねばならぬことを覚えておけ」と言つた。すると彼は顔色も動かさないばかりか、傲慢不遜に構えて、この脅しに一言も答えずに押しとおした。そこでアレクサンドロスはこの高慢でしぶとい沈黙を見てとつて、「膝を曲げぬな。哀れな泣き言ももらさぬな。よし、おまえの沈黙を破つて見せる。言葉を吐かせることができないければ、うめき声くらいは上げさせてやるぞ」と憤怒を狂暴に変え、彼の両の踵に孔をあけて綱を通し、これを生きながらに戰車につないで引かせ、体をばらばらに引き裂かせた。豪胆ということは大王にとつてはごくありふれたことであつて稱讃に値しなかつたから、それだけこれを尊重しなかつたのであろうか。⑥それとも、豪胆は自分一人にだけ屬するものと考え、これが他人のうちにこれほど見事に發揮されたのを見て嫉妬の情に堪えられなかつたのだらうか。あるいはまた、生れつき怒つてかつとなる激情をどうしてもせきとめられなかつたためだらうか。もしその怒りが制止できるものなら、テバイ市の占領と掠奪の際に多くの勇士たちが潰滅し、一致して防禦する手段を失つて、むごたらしく刃にかけられるのを目にしたときにも怒りを抑えられたにちがいない。現にそのときも六千人を越す兵士が殺されたが誰一人として逃げたり、助命を願つたりする者がなく、かえつて、街路のあちこちに、勝ち誇つた敵にいでんで、名譽ある

(9) ディオドロス・シクルス「歴史」一四の二九。(以下「歴史」を略す)
(10) プルタルコス倫理論集「政治訓」。ゼノンとあるのはステノンの誤り。
(11) クイントゥス・クルティウス「アレクサンドロス大王の事蹟」四の六。

死を求めて立ち向かつていった。いくら深傷を負っても、最後の息にあえぎながら復讐を試みない者はなく、絶望の刃をふるいながら敵の誰かを倒して自分も死ぬことに慰めを見いだそうとしない者はなかった。しかし、彼らの勇気のいたましさは大王からいささかの憐憫もこうむらず、一日の長さは大王の復讐欲を満足させるに足りなかった。この虐殺は血の最後の一滴が流されるまでつづいて、武器を持たない老人、女、子供らのところに來てはじめて止んだ。それも彼らから三万人の奴隸を得ることを考えたためである。

第二章 悲しみについて

⑩私はこの感情をもっとも免れている者の一人である。そしてこれを好みもしないし、尊重もしない。ところが世間の人々はまるで当然のことであるかのように、これに特別な好意を寄せて尊敬している。彼らはこの着物で知恵、徳性、良心を飾っている。実にばかげた装いだ。イタリア人が悪意をこの名前と呼んだのはいっそう適切であった。なぜなら、それは常に有害で、常に狂気じみた特性であって、ストア派は常に臆病で卑しいものとして彼らのいう賢者にこれを禁じているからである。

しかし次のような話がある。ペルシア王カンビセスに敗れ捕虜となったエジプト王プサメニトウスは、自分の娘が捕われて奴隸の服装で水を汲みにやらされその前を通るのを見て、友人たちはみんな、まわりで泣き悲しんだのに、彼は目を地面にそそいだまま一言も言わずにじっとしていた。それから間もなく、息子が死刑に連れ去

られるのを見たが、同じ落着きを押しとおした。だが彼の臣下の一人が捕虜の中にまじって連れてゆかれるのを見ると、はじめて自分の頭を叩き、ひどい悲しみを表わした。

この話は、最近われわれの皇子の一人について見られたことと匹敵しよう。この皇子はトレント³にあつて、一門全体の柱石であり名譽であつた兄君の計報に接し、そのすぐ後に、第二の希望であつた弟君の計報を受けたのに、この二つの打撃を模範的な氣丈さをもつて堪えたのであるが、数日後に臣下の一人が死んだときに彼はこの最後の出来事に負けて、これまでの剛毅さを捨てて悲嘆と愛惜にくれたので、ある人々は、彼がこの最後の打撃ではじめて心に痛手を受けたのだと推論したほどであつた。しかし本当は、すでに悲しみに満ち溢れていたから、ほんのわずかのおまけの刺激で、忍耐の堰が切れたのである。もしも、前の話に次のようなつけ加えがなかったらこれと同じような判断がくだせたであらう（と私は思う）。そのつけ加えというのはこうである。カンビセスがプサメニトウスに向かつて、息子と娘の不幸には心を動かさなかつたのに、一友人の不幸にどうしてあんなに我慢ができなかつたのかとたずねたところ、「それは、この最後の悲しみだけは涙によつて表わせるが、前の二つを表わすことはいかなる手段をもつても遠く及ばないからだ」と答えた。

あの古代の画家の工夫についてもおそらく同じことが言えるだらう。彼はイフィゲニアの犠牲の中で、それに列する人々の悲しみを、この純潔な乙女の死に寄せる関心の度合いに應じて表現しようと思つたが、いよいよ娘の父親を描く番になったときには、あらゆる技巧を使い

(12) デイオドルス・シクルス、二七の四。

第二章

(1) イタリア語の tristezza には悲しみと悪意の意味がある。

(2) シャルル・ド・ギーズ。

(3) イタリア北部の都市。

果たしてしまったので、ただ顔を覆っている姿に描いたそれはちょうどいかなる姿もこれほどの悲しみを表わしえないかのようであった。だから詩人たちも、先に七人の息子、次いで同じ数の娘を失って、痛手に打ちひしがれている母親のニオベを、ついに岩に姿を変えられたと想像したのである。

悲しみのために石と化した。^④

それによって、彼らは、われわれの力を越えるいろいろな出来事に圧倒されたときに呆然として声も出せず、耳も聞こえなくなるあの沈鬱な痴呆状態を表現しようとしたのである。

実際、悲しみの力が極まると魂全体を驚愕させ、その自由な働きを妨げる。たとえば、われわれはひどく悪い知らせに急に驚くと、何かに押えつけられ、身内が凍って、全身不随になるが、その後で悲嘆の涙にくれて心がゆるんでくるとはじめて束縛から解き放されて、自由な楽な気分になることがある。

③そしてついに悲しみはようやく声に道を譲った。^⑤

④フェルジナンド王がハンガリー王のジャンの未亡人に対してブダのあたりでおこなった戦争において、ドイツ軍の隊長ライシアックは、一人の騎士の死体が運ばれて来るのを見たが、この騎士の乱戦における目覚ましい働きは注目的であったので共に哀悼の意を表した。しかし皆と同じように、彼が何者であるかを知りたいたいと思ひ、武器を脱がせてみると、ほかならぬ自分の息子で

あるとわかった。並みいる者が涙にくれるうちに、彼だけは声も上げず、涙もこぼさず、じっと立ちつくして、目をこらして息子を見つめていたが、ついに悲しみに生命が凍りついて、地面にぱたり倒れてそのまま息が絶えた。

④焦げ工合を言いうる者は弱い火に焼かれている者だ。^⑥

と恋人たちは言って、堪えがたい恋の焰をこう表現しようとする。

恋はあわれな私からすべての感覚を奪った。なぜなら、レスビアよ、私はおまえに会うと、とたんに理性を失い、言うべき言葉も知らず、舌はもつれ、えも言われぬ火が五体に拡がり、耳は鳴り、目は闇に閉ざされるのだ。^⑦

④このように激しく焼けつくような興奮のさなかにあるときは、悲嘆や口説きを十分に拡げてみせるのは適当ではない。その時、精神は深い物思いに悩み、肉体は恋にひしがれやつれているからだ。

④そういうわけで、ときどき偶然に、突拍子もないときに、恋人たちが気絶したり、極度の情熱のあまり、喜びの最中にさえ無感覚に襲われたりすることがある。味わい、消化できる情熱はすべて平凡なものではない。

軽い悲しみは語り、深い悲しみは沈黙する。^⑧

④思いがけない不意の喜びも同様にわれわれをびっく

(4) オウィディウス「メタモルフォセス」四の三〇四。
(5) ウェルギリウス「アエネイス」一の五一。
(6) パウルス・ロウィウス「現代史」三九。
(7) 原文イタリヤ語。ペトルカルカ「十四行詩」一三七。
(8) カトウルス、三の五。
(9) セネカ「ヒッポリテス」二の三の六〇七。

りさせる。

彼女は近づく私をみとめ、あたりにトロヤの武具を見て、大きな奇蹟に打たれ、茫然として石と化して、体は冷たくなった。彼女は氣を失い、しばらくしてようやく言葉を發した。

④カンナエの敗北から思いもかけず帰って来た息子を見つけて喜びのあまりに死んだローマの婦人や、嬉しさのために死んだソフォレスや僭主ディオニシオスや、ローマ元老院から送られた名譽の知らせをコルシカで読んで死んだタルナのほかに、われわれの時代には、法王レオ十世が渴望してやまなかったミラノ占領の報に接し、歡喜のあまり熱を出して死んだことが伝えられている。また、人間の愚かさのさらにいちじるしい証拠として古代人は弁論家のディオドロスが彼の学校で公衆の前で、しかけられた議論にうまく答えられなかったことを、ひどく恥かしく思い、その場で息絶えたことを指摘している。

⑤私はこういう激しい感情にはとらえられない。私は生れつき血のめぐりが鈍い。そしてそれを毎日理性によつて硬くし、厚くしている。

第三章

われわれの感情はわれわれを越えてゆくこと

⑥人間がつねに未来のことにばかり見とれるのを非難して、「われわれ人間は未来のことは過去のことに以上

に無力なのだから現在もっている幸福をつかんで、それに満足せよ」と教える人たちは人間の犯す過誤のもつとも普通のものに触れている。ただし自然自らがその仕事を継続させてゆくためにわれわれをそこへ向けているものをも、彼らがあえて過誤と呼ぶものと仮定してである。

⑦彼らは、自然がわれわれの知識よりも行動のほうを渴望してわれわれの中に他の多くの考えと共に、この誤った考えを刻み込んだと考えるのである。⑧われわれはけつして自分のもとにいないで、常にわれわれの向うにいる。不安や、欲望や、希望はわれわれを未来に押しやり、将来のこと、しかもわれわれの死後のことに心を煩わせて、われわれから現在にあるものについての感覚や考慮を奪い去る。《未来を思い煩う心は不幸である》⑨「汝のことをなし、汝自身を知れ」という偉大な教訓はプラトンの中にしばしば述べられている。この命題の二項は広くわれわれの義務のすべてを含み、また、各項がたがいに他の項を含んでいる。つまり、自分のことをしようとする者は、自分が何であるか、また自分の特質は何であるかを知ることが第一の務めだと知るであらう。また、自分を知らずしては、もはや他人の仕事や自分の仕事とは考えない。何よりも自分を愛し、自分を磨く。よけいな仕事や無益な思考や計画を拒む。《暗愚は欲望がかなえられても満足しないが、知恵は現にあるもので満足し、けつして自己に不満をもたない。》

エピクロスは彼のいう賢者に「未来の予想を心配するな」と言っている。

⑩死者に関する法律のうちで、帝王たちの行為はその死後において検討されねばならぬときめた法律はたいへん立派だと思ふ。帝王たちは法律の主人でないまでもそ

(10) ウェルギリウス「アエネイス」三の三〇六。

(11) 南イタリア海岸にある都市。ここで前二一六年、ローマ軍はハンニバルに大敗した。

(12) グイツシャルディーニ「イタリヤ史」一四。

(13) プリニウス「博物誌」七の五四。

第三章

(1) セネカ「書簡」九八。

(2) キケロ「トウスケルム論議」五の一八。

(3) 同右 三の一六。

の友であるからだ。正義が帝王たちの生前にその頭上にふるうことのできなかつた力を、彼らの死後の評判の上に、後継者たちの幸福の上にふるうのは道理になつてゐる。これらのものはわれわれがしばしば生命よりも重んずるものだから。この慣習は、それが実施されている国民には非常な利益となり、また、善良な帝王たちには歓迎すべきものである。④彼らは邪惡な帝王たちの思い出と混同されるのを迷惑する十分の理由があるからである。われわれはどんな帝王にもひとしく隷屬と服従の義務を負つてゐる。なぜなら、それは彼らの職權に關することだからである。だがわれわれは尊敬とか、まして情愛とかの義務を、彼らの徳性に対してのみ負つてゐる。われわれは、國家の秩序のためには、帝王としてふさわしくない者たちをも我慢して堪え、彼らの支配がわれわれの助力を必要とする間は、その欠点を隠してやり、可もなく不可もない行為をも誉めちぎつて立派に見せることは認めてやつてもよい。しかし彼らとの關係がなくなつた後に、正義とわれわれの自由にわれわれの本当の感情の吐露を拒むのは正しくない。とくに、主君の欠点を熟知しながら尊敬と忠誠をもつて仕えた榮譽を善良な臣下たちに拒むことは正しくない。これではかくも有益な手本を子孫から取り上げることになる。また、何かの個人的な恩義を受けたことのために、誉める値打のない帝王の思い出に不当に味方する者は個人の義理のために公の正義を損う者である。ティトゥス・リウィウスが、「帝王の下に養われた人間の言葉は愚かな虚飾と空虚な証言に満ちてゐる。彼らは皆、その帝王を無差別に有徳至高の極限まで持ち上げるからだ」と言つたのは本當である。

われわれは、皇帝ネロに向かつて、恐れる色もなく返答した二人の兵士の氣位の高さを非難してもよい。その中の一人は、なぜ自分に危害を加えようとしたかと問われて、「私はあなたが愛されるに値した間は愛した。だがあなたが親殺し、放火人、香具師、馬丁となり下がつてからは、それにふさわしく嫌惡する」と答えた。もう一人の兵士は、なぜ殺そうとしたかと問われて「あなたの不斷の惡行にはほかに薬がないから」と言つた。しかしながらネロの死後に、その暴戾惡辣な所業について万人が一致してなした証言、そして今後も永久になされるであろう証言に対しては、分別ある者なら誰も非難はできないであらう。

私はラケダイモンのような神聖な政治の中に一つのはなはだしい見せかけの儀禮がまじつてゐるのを残念に思う。つまり、王が死ぬとすべての同盟國、隣國人、すべての奴隸が男も女も入りまじつて、哀悼のしるしに、自分の額に傷つけ、泣き叫びながら、彼らの王が實際はどんな王であつたとしても、あらゆる王のうちでもっともよい王であつたと声を揃えて言う習慣があることである。こうして彼らは、勲功に与えるべき稱讃を王という地位に与え、最上の功績に帰すべきものをもっとも下位の卑しむべき地位に歸したのである。あらゆる問題を論じたアリストテレスは、ソロンが「何人も死なないうちは幸福とは言えない」と言つたことについて、立派に生き、かつ死んだ人でも、もし死後の評判が悪く、子孫が不幸だつたら幸福といえるかどうかと問うてゐる。われわれは生きてゐる間は、先廻りをしてどこへでも好きなところに行ける。だが死んでしまえば現にあるものとは何らのつながりもなくなる。したがつてソロンは「人間はけ

(4) ティトゥス・リウィウス「ローマ史」三五の四八。(以下「ローマ史」を略す)
 (5) タキトゥス「年代記」一五の六七および六八。
 (6) 「ヘロドトス」「歴史」六の六八。(以下「歴史」を略す)
 (7) アリストテレス「ニコマコス倫理學」の一〇。

つして幸福になれない。なぜなら、人間は死んだ後でなければ幸福ではないのだから」と言ったほうがよかったであらう。

④ 人生から自分を離脱し、投げ出すことはむずかしい。人は無意識のうちに、自分の何かが後に残ると想像するから、死んでもからも肉体を離れ、その束縛を脱することができない。

⑤ ペルトラン・デュ・ゲ克蘭はオーベルニュのビュイの近くのランコンの城を囲んでいるうちに死んだ。その後、籠城者たちが降参したときに、彼らはデュ・ゲ克蘭の屍の上に城の鍵を捧げさせられた。

ヴェネツィア軍の総帥バルトロメオ・ダルヴィアノはブレシアノ地方の戦争中に死んで、その遺骸をヴェネツィアに運ぶに当たり、敵地であるヴェロナを通らねばならなかったときに、大部分の将士はヴェロナの人たちに通行証を出してもらうように頼むのがよいという意見を出した。しかし、テオドロ・トリウオルツィオはこれに反対して、まさかの場合は一戦を交えても武力で通るほうを選んで、「生前に一度も敵を恐れたことのない人が死んで敵を恐れるふうを見せることはふさわしくない」と言った。

⑥ 実際に、これと似た事柄で、ギリシアの法律では、敵に対し埋葬のため死体を収容することを要求したほうに勝利をあきらめ、戦勝の標柱を建てることを許されなかった。そして要求された側に勝利の名目を与えられた。こうしてニキアスはコリントス人から得た明らかな勝利を失った。反対にアゲシラオスはポイオティア軍に対す

るはなほだ怪しい勝利を確実なものにした。

⑦ このような事柄は、もしも、われわれが自分の来世のことまで思い煩うだけでなく、神の恩寵がわれわれに墓場までついて来て引きつづき遺骨にも及ぶという考え方がいつの時代にも認められていなかったとすれば、不思議に思われるかも知れない。これの実例は古代にはいくらでもあるので、私がわざわざ詳説する必要もないくらいであるが、ただ次のわれわれの例は特別だ。イギリス王エドワード一世はスコットランド王ロベールとの長期にわたる戦さの間に、自ら先頭に立って戦ったときには常に勝利を得ていることから、自分の存在がいかに味方の戦闘に有利であるかを経験していたので、死に臨んで、皇太子に向かい、自分が死んだら遺骸を煮て肉と骨をばらばらにほぐし、肉は埋葬し、骨はとっておいて、スコットランドとの間に戦争があることに皇太子がこれを携えて将兵と共にあるようにせよと命じておごそかに誓いを立てさせた。それはまるで運命が勝利を彼の五体に結びつけているかのようであった。

⑧ ウィクリフの異説を守るためにボヘミヤを混乱させたヨハン・ジシムカは自分の死後に皮を剥いで太鼓を作り、敵と戦うときに持つてゆくように命じた。それによって、彼が指揮して得た勝利を持続しうると考えたからである。同様に、あるインド人たちは、スペイン人との戦争に、彼らのある酋長が生前に武運が強かったというので、その遺骨を携えていった。また、同じ大陸に住む他の種族は、その戦争で死んだ勇士たちの屍を引きずっていつて武運と激励の役に立てようとした。

⑨ はじめの例は過去の行為から得た評判を墓にとどめておくにすぎないが、後の例はそこに何か働きかける力

(8) ルクレティウス「事物の本性」三の八七七。(以下「事物の本性」を略す)

(9) 一三二〇頃—一八〇、フランスの将軍、百年戦争で活躍した。

(10) グイツシャルディーニ「イタリヤ史」二二。

(11) 前五世紀、アテナイの政治家、将軍。

(12) 前五世紀のスパルタ王。

(13) プタルコス英雄伝「ニキアス篇」六 および「アゲシラオス篇」一。

(14) ジャン・ウィクリフ。一三八四年生れ、イギリス宗教改革の先駆者。

(15) 一三七〇頃—一四二四、ボヘミヤの国民的英雄、フス派の軍の首領として活躍した。

を加えようとしている。隊長バヤールの例はさらによい例である。彼は火繩銃に打たれ、それが致命傷であることを知ったが、戦線から退くようとするめられると、自分は今さら最後になって敵に背を向けることはしないと答えた。そして、力の限り戦って、気が遠くなって馬から落ちそうになったので、別当に命じて樹下に身を横たえさせた。ただし、顔を敵に向けて死ぬるようにと命じて、そのとおりして死んだ。

これに関連して、前のいずれにも劣らず珍しい別の例をつけ加えねばならない。今の皇帝フィリップの曾祖父に当たるマクシミリアン帝は天性多くのすぐれた資質に恵まれていたが、とくにその体の美しさは類がなかったところから、彼の気質の中には、どんなに重要な政務でもいそがしいときには便器を玉座代りにしてそれを片づける帝王たちの無造作さと正反對のところがあつた。それは、どんなに彼の内輪の生活に立ち入った従僕にも、自分の側にいる姿を見ることを許さなかつたことである。

彼は小便をするにも人に隠れてした。人が通常隠しておく箇所を、医者にも誰にも見せまいとして処女のように小心に気をくばつた。③私はどうかという、ずいぶん恥知らずな口を利くが、やはり、生れつきこの羞恥の念はもっている。必要に迫られ、情欲に大いにそそられた場合は別として、われわれの習慣が隠しておくように命ずる部分や行為を人の目にさらすことはほとんどしない。この点では、男子として、とくに私のような職にある男子として、十分ふさわしいと思う以上に遠慮気兼ねをしている。しかしマクシミリアン帝の、④その神がかりな羞恥はいよいよひどく、とうとう、遺言書に、自分が死んだら股引をはかせるようにと命ずるまでになった。そ

れならいっそのこと、それに追加として、自分に股引をはかせる者は目隠しをすること、と書き加えるべきであつたらう。⑤キエロスは子供たちに命じて、魂が肉体から離れた後は、彼らも、ほかの誰も自分の肉体を見たり触れたりしてはならぬとしたことを、私はこれを彼の何かの信仰心のせいだと考える。というのは、彼の伝記作者も彼自身も彼らの生涯の間の、もろもろのすぐれた特質について書いているが、そのあちこちに宗教に対する異常な熱心と敬虔の念が見られるからである。

⑥ある高貴なお方が私の姻戚で、平時にも戦時にもかなり有名な人について、私にしてくれた次の話は私を不快にする。彼はその高貴なお方の宮廷で、老齢になってから、結石のひどい痛みを悩んで、いよいよ死のうとするときに、非常な熱心さで、残った最後の時間を全部使って、自分の埋葬の名譽と葬儀の段取りをし、見舞いに來たすべての貴族に葬式に列席することを約束してくれと頼んだ。彼の最後の様子を見舞つたその宮様に向かつて、宮家全体に命じて葬儀に参列させてもらいたいとしきりに懇願し、たくさんの例や理由を挙げてそれが自分のような者にふさわしいことを証明した。そうして、その確約を得、葬儀の手筈や順序を心ゆくまで指図した後で、安心したように息をひきとつた。私はこれほど執拗な虚栄心をあまり見たことがない。

これと反對の別の執着の例も私は身内に事欠かないが、これも今述べたものと同類だと思う。それというのは、自分の葬儀に特別に異常な儉約をして、従僕は一人、灯籠は一個とぎりぎりまで切りつめようとする執着である。私はこういう考え方が称讃され、また、マルクス・アエミリウス・レピドゥスが後継者たちに世間の慣習となつ

(16) 一四七六—一五二四、フランスの軍人、イタリア戦争で戦功を立てた。
(17) 前六世紀のペルシアの大王。
(18) タセノフォン。
(19) カニサルの部下で、カニサルの死後、アントニウスとオクタウィアスと三頭政治を組織した。

ている葬儀を自分に用いるのを禁じたことが称讃されるのを見てゐる。いったい、死後のわれわれが享樂することとも認識することもできない出費や贅沢を遠ざけることもやはり節制とか質素とかいふべきものだろうか。こんな改革は容易で、大した苦勞を要しないものだ。⑮もしも葬儀について前もって指図しておかなければならないなら、私はその規模を人生のあらゆる行動と同じように、各人がその境遇に応じて定めたらよいと考える。哲學者リユンは賢明にも、友人たちに、自分の遺骸は彼らがつともいいと思う場所に埋めるように、また、葬儀は贅沢でも貧弱でもないようにと命じた。⑯私はそれについては慣習の命ずるところにお任せする。そして誰であらうと自分が世話になる人たちの決定にお任せする。⑰「このことはすべてわれわれにはどうでもよいことだが、後に残る者には無視できないものだ。」また、ある聖人は聖人らしく言った。《葬儀への配慮、墓所の選択、葬式の盛大さは死者の救いというよりはむしろ生者の慰めである》と。だからソクラテスも、最後に臨んでどのように葬られたいかとたずねたクリトンに、「おまえの好きなように」と答えた。⑱私は、もしも前からそのことに心を用いなければならぬとすれば、生きて息をしているうちに自分の葬儀の盛大や名譽を享受しようとし、大理石に彫った自分の肖像を見て喜んでゐた人たちを真似るほうがずっとふさわしいと思う。無感覚によつて自分の感覚を喜ばせ、死によつて生きることのできる人たちは幸いである。

⑲私は民主制がもっとも自然でもっとも公正だと思ふにもかかわらず、アテナイの民のあの非人道的な不正を思い出すと、あらゆる民主制に対し、許しがたい憎惡を

いだきそうになる。彼らはアルギヌサ島の近くで、スパルタ軍との間に、これまでギリシア人が海上でおこなつたうちでもっとも頑強で激烈な海戦から凱旋してきた勇敢な隊長たちを、一刻の猶予も与えず、弁解を聞こうとせず、死刑にした。その理由はこの隊長たちが勝利の後で、兵法上の好機を追うことにばかり氣をとられて、船を停めて味方の死体を收容し、埋葬しなかつたためである。さらにディオメドンの行動はこの刑の執行を一段と憎むべきものにした。彼は受刑者の一人であるが、戦争においても、政治においてもすぐれた徳性の持ち主であつた。彼は死刑の判決を聞いた後で進み出て、民衆が静まつたときをとらえて、口を開いたが、自分の立派な言い分や、これほど残酷な判決の明白な不正を証明することは一言も言わずに、ただ裁判官たちの身の安全が心配であることだけを述べて、この判決が彼らの幸福に転ずるやうにと神々に祈つた。そして、これほど目覚ましい戦勝に感謝して、自分たちがかけた誓願を果たすことができないことから、神々の怒りが裁判官たちの上に向けられることのないやうにと、その誓願の内容を彼らに明かした。それから、ほかのことは何も言わず、異議もとなえず、力強い足取りで死刑を受けに出かけて行つた。運命は数年後にアテナイ人にしつぺい返しをした。そのわけは、アテナイ海軍の総大将カブリアスがナクソス島でスパルタの提督ポリスと戦つたとき、前軍の轍を踏むまいとして、明らかに確実な勝利の成果を、しかも彼らのためにきわめて重大な成果を失つたからである。そして味方のわずかばかりの死体が海上にただよっているのを失うまいとして、生きてゐる大勢の敵が安全に漕ぎ去るのをそのまま見送つたが、やがてこの敵からこのわ

(20) 前三世紀、トロヤ生れの遠遼学派の哲學者。

(21) デイオゲネス・ラエルティオス「哲學者列伝、リユン伝」五の七四。

(以下、哲學者列伝を省く)

(22) キネロ「トラスクラム論議」一〇四五。

(23) アウグスティヌス。

(24) アウグスティヌス「神の国」一の二。

(25) プラトン「パイドン」二六A。

(26) エーゲ海のキオス島の近くの島。

(27) デイオドロス・シタルス、一三の三および三。